

青年期にある人工内耳装用者の自己認識の検討

—アンケート調査の自由記述から—

○石田彩

高橋信雄

(愛知淑徳大学健康医療科学部) (鷹の子病院愛媛人工内耳リハビリテーションセンター)

KEY WORDS: 人工内耳 青年期 自己認識

I. はじめに

近年の新生児聴覚スクリーニング検査の普及によって、聴覚障害児を早期に発見することが可能となり、幼児人工内耳装用者が増加し続けている。そんな中、幼児期に人工内耳を装用して成長し、青年期に差し掛かっている装用者もまた増加している。青年期は「自分は何者であるか」という問いをもち、自己を認識していく重要な時期である。幼い頃から人工内耳を装用し、重度聴覚障害者でありながらも、音の世界との接点をもって過ごしてきた人工内耳装用者は、自身について様々な葛藤を抱く青年期において、人工内耳や聴覚障害に対してどのような意識を抱いているのか。また、人工内耳装用者としての自分と聴覚障害者としての自分をどのように認識しているのか。これまで、聴覚障害者のアイデンティティ形成に関する研究は数多く行われてきたが、青年期にある人工内耳装用者の心理的な面に焦点を当て、装用者本人に対して調査を行っているものは少ない。そこで、筆者は幼児期から人工内耳を装用して育った人工内耳装用者に2年間のアンケート調査を行ってきた。その間に装用者は学校の卒業、入学、就職などそれぞれに人生の転機となるようなイベントを経験している。そのような中で装用者の自己意識に変化はみられたのかを、2年通してアンケートの回答を得ている事例より検討した。

II. 方法

1) 検討対象

人工内耳装用者 女子2名 (以下、A、Bとする)

A: 1回目調査時点で高等学校2年生

B: 1回目調査時点で聾学校高等部3年生

2) 検討方法

過去2年間に実施したアンケートの自由記述欄について、A・Bの自由記述内容の変化をそれぞれ検討する。

過去2年間の調査で共通する質問は、荒木(2014)を参考として作成した以下のものである。

- ①人工内耳をしていてよかったと思うか
- ②あなたの子どもがあなたと同じように聴覚障害であったら、人工内耳の手術をして育てたいと思うか
- ③人工内耳を装用していることを学校の先生や友達には伝えているか
- ④きこえる友人と自分は違うと感ずることがあるか
- ⑤「なぜ自分だけ聴こえないのか」と思ったことはあるか
- ⑥「なぜ自分だけ人工内耳をつけなければいけないのか」と思ったことはあるか
- ⑦聴こえない自分や人工内耳のことをどう思うか

III. 結果と考察

1) 装用者Aについて

Aについては、過去2回の調査の両方で変化のなかった部分は、①の人工内耳をしていて良かったという点であった。その理由も「人工内耳をつけていたほうが音が聞きやすいから」というもので、音を聞き取ることに人工内耳が役立っており、A自身もそれに満足していることがうかがわれた。また、②についても「自分と同じ経験をしてほし

い」という内容が書かれており、人工内耳に肯定的な意識を抱いていることがうかがわれる。その一方で、③については1回目では「人工内耳をしているけど音は聞こえませぬ」という記述であったのに対して、2回目では「自分は聞こえないので人工内耳をしています」というように、自身について「聞こえない」と表現したり、④では、1回目の調査で健聴者と自分を違うとは感じていなかったが、2回目の回答では「雨の時は聞きづらい」と、自分の聴覚障害に言及する記述がみられたりした。また、⑤や⑥では「個人差があるのはわかっているから」や「人によってそれぞれなのはわかっているから」など、「人と人は違う」ことを強調する記述が中心であった。人工内耳によってある程度の音の認識は可能であるが、なお聞こえにくさが残る聴覚障害者としての自身への気づきと、そうだとすると、人はそれぞれであり、聴覚障害である自分を否定的にとらえるというよりも、聴覚障害も含めて自分でよいのだという、肯定的な自己認識をはぐくむ過程にあるように思われた。

2) 装用者Bについて

装用者Bについては、1回目と2回目の調査の両方に共通して「聴覚障害者としての自分」を否定的にとらえる記述が多くみられた。例えば、「聞こえる友達のことがうらやましい」や「もし普通の人になったらどんな感じだろう」という健聴者への憧れの気持ちや「音がうまく聞き取れない」や「話すのが下手」「健聴者のようにうまく話せない」などの記述が一貫してみられた。しかし一方で、①についてはどちらの調査でも「まあよかったと思う」と回答しており、自身の人工内耳を完全に否定しているわけでもないと思われた。人工内耳を否定的にとらえているわけではないが、自身の聴覚障害への見方は否定的な傾向にあり、その背景には、人工内耳をしていたとしても、「自身の満足のいくコミュニケーションの経験をできていないこと」があるように予測された。そしてそれは、1年間という期間に限ってみれば、Bの中でほとんど変化することのない認識として一定のものとなっていることも考えられた。

IV. まとめ

今回、2名の人工内耳装用者の過去2度の調査の自由記述を中心に振り返る中で、聴覚障害である自身に気づきながら「人それぞれ」と前向きに自身を認識していく過程にある装用者と、一貫して自身の聴覚障害を否定的に捉えるようになっていく装用者の姿が垣間見えた。そこには人工内耳の装用効果としての聞き取りの力や発話能力が一つの要因としてかかわっていることが予想された。今後は、今回の結果を手掛かりとして、面接調査を中心とした本人の語りから、個々人の自己認識に影響する要因を探っていきたい。

(文献)

荒木友希子(2014)「障害のある子が育つということ-幼児期に人工内耳埋め込み手術を施行した聴覚障害児の事例から考える-」子育て研究 第4巻 20-30 他

(ISHIDA Aya, TAKAHASHI Nobuo)